現代文ノート・付せんに意見を書かせる

言語力の評価方法を工夫

思考の過程チェック

福井県立若狭高校

思考力や判断力、表現力を伴った言語力の育成に注目が集まる中、そうした総合的な能力をどのように評価するかも大きな課題。福井県立若狭高校（古谷活也校長、生徒989人）は昨年度から、文部科学省の「学力の把握に関する研究指定校」として、現代文を中心に、評価の在り方を模索している。ノートや付せんで示された生徒の学習記録から、言語の活用能力を評価しようという取り組みだ。

県立若狭高校が10月に開いた現代文の研究発表。入試問題や新聞記事などの資料を基に、2年生の生徒が話し合ったのは今年4月、43年ぶりに実施された学力・学習状況調査について。「全国一斉学力調査は是か非か」が単元のテーマだ。

さまざまな情報を活用しながら、考えを声に出して、論理的に表現することを目標に設定した。

授業では初め、教師が用意した賛成派の意見を読み、その論旨をノートにまとめさせる。次に、その意見に対する反論をまとめさせた。

授業した渡邉久暢教諭は「自分の考えをノートや付せんに書き出させた上で、それぞれの意見を交流させる、という過程を何度も繰り返した。これによって、生徒の論理的な言語活用能力が高まっていった」と話す。

◇

来年告示される学習指導要領について、国語科が改善すべき方向性は、「論理的な言語活用能力の育成」とされている。その背景にあるのは、PISA調査などで明らかになった記述式問題への無回答率の高さだ。

国立教育政策研究所が実施した高校の教育課程実施状況調査でも、理由や根拠を基に自分の考えを書く問題の無回答率が高かった。

同校の生徒にもそうした傾向は見られ、正しいと確信している回答しか書こうとしない生徒が多かった。「1年生では『質より量』。まずは、書くことに対する抵抗感を減らし、2年生の後半から質に転換する」と渡邉教諭は話す。

単元によっては、授業の半分近くで文章を書かせることに充てる。テーマは「学校前のコンビニに、どんな商品を並べたら売れるか」「携帯電話に依存することは悪いこと」など、生徒に身近な内容が多い。

入学当初は、3行程度から始め、1年生の終わりには、ノート1ページ分くらい、授業中に文章を書かせるようにするという。

◇

生徒がまとめたノートを最も活用するのは評価の場面だ。図1・2は、「学力調査」の単元で、生徒がまとめたノートの例。

図1のノートは賛成派の意見を、要点をつかんで整理した上で、それぞれに対応した反論（付せん）を加えることができている。それに対して、図2の生徒は、示された意見をうまくまとめられず、反論も2つにとどまっている。

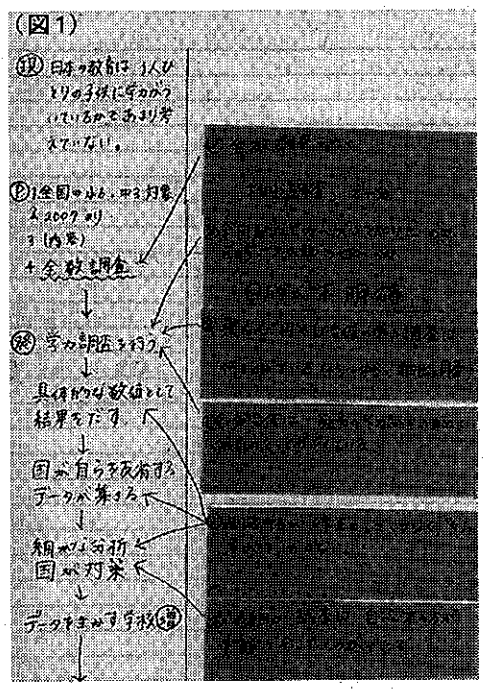
この日の学習は「賛成派の意見をノートに図示できているか」「効果的な反論について話し合うことができているか」「この日の学習をノートに整理できているか」などの規準で評価する。

ノートは、ほぼ毎時間回収。空き時間などを利用して読み、次時の指導に生かすという。

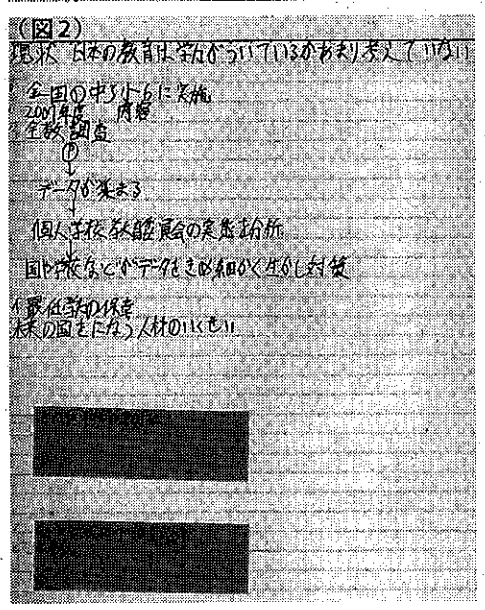
課題解決の過程を通して学習を評価する「パフォーマンス評価」を研究する京都大学大学院の西岡加名恵准教授は、長期的な見通しを持ちながら、日々の授業の指導と評価を組み立てている点が言語活用能力の育成につながっているのではないか、と見ている。

若狭高校☎0770・52・0007

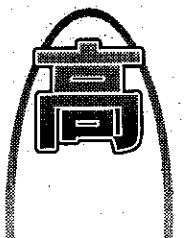
（図1）



（図2）



身近なテーマ扱い賛否問う



専門高校のいま ・21・

耐力養う

自動車工場でインターンシップ中の柘植さん（左端）と鈴木さん（右端）

リア委員会で検討してきた。

3年間を見通したプログラムで、1学年は映像をふんだんに取り入れながら、「こんなふうこまはりこころない」「自分の受が進路未定のまま卒業した年もあった。危機感を強めた管理職らが、対策を呼び掛け始まった。

◇

同校はこのほど文部科学省から「キャリア教育優良取組団体」として表彰を受けた。「継続して実施してきたことが評価されたのかもしれない」と田中校長。これを機に「郷

技匠が伝授

業高校定時制

学ぶ授業で

を確認する倉持さん（右）（左）

統合失調症の理解へ

高校生向けに指導案

教師用マニュアルも

医薬品会社など

10歳代後半から発症率が急増する統合失調症について、正しい知識や理解を持ってもらおうと、医薬品会社の日本イーライリリー（神戸市）とNPO法人企業教育研究会がこのほど、高校生に向けた指導案を開発した（次号、授業例を紹介）。

高校生のころから同障害に悩む1人の当事者の事例を紹介し、症状についての理解を促す内容。

また、授業する教員にも疾病を正しく理解してもらうため、併せて教師用のマニュアルも作成した。指導者の知識が不十分だと、「誤解や偏見を広げかねない」としている。

統合失調症は、以前まで「精神分裂病」と呼ばれてきたが、病名によって、患者が偏見や差別を受けてきたとして、平成14年に現在の名称に変更。治療を受ける患者は73万4000人いる（14年患者調査）。

日本精神神経学会理事長を務める東北福祉大学大学院の佐藤光源教授は「研究が進み、治療によってリスクが下げられることが明らかになっている。早期の発見と治療が重要だ」と今回のプログラムの意義を強調する。

日本イーライリリーでは今後、プログラムの修正を重ね、教育委員会に普及を呼び掛けたいとしている。

問い合わせ☎078・242・9000

新指導要領

私の授業案〈4〉

現代文

寺嶋毅・埼玉県立春日部女子高校教諭

「語彙力」「読解力」「表現力」を基本理念に

私は「現代文」に必要な力として、「語彙力」「読解力」「表現力」の3つの柱を考えている。PISAの調査結果によるまでもなく、高校生の読解力の低下は、日々の授業でもひしひしと感じられる。

語彙力の低下もはなはだしい。調査結果によると、漢字の定着については、それほどの心配もないような見方がされているが、現場に立つ一教員にすれば、結果には疑問が残る。

今回、学習指導要領の改訂に際して、PISAの結果を反映し、論理的な思考力や表現力を、より重視する方向性が打ち出された。それらを踏まえ、私は先に挙げた3つの柱を強く指導の基本理念として考えたい。

まず、「語彙力」については、単に語彙数の記憶を競うのではなく、言葉の運用という面から考える必要がある。具体的には①漢字の書き取り・慣用句の習熟②ワード単位の言い換え能力の育成―である。

「ワード単位の言い換え能力」については、単に辞書的な意味の理解ではなく、例えば「ある単語の意味を小学生に伝える場合にはどう表現するか」といった表現の工夫に重点を置いた学習活動が考えられる。

「読解力」については、①論理的思考力②情報処理能力の二面から考えたい。今後求められる国語力は、①に見られるように論理的な思考と表現と、②のように、多様な文章や資料を手際良く読み取る処理能力だ。

そのため、教材については、人文・社会・自然科学などの諸分野を網羅したものが望ましい。

最後の「表現力」については、①論理的な表現力（伝え合うための分かりやすさ）②フレーズ単位の言い換え能力―を挙げておきたい。特に「フレーズ単位の言い換え能力」は、「語彙力」で挙げた言い換え能力と連動させた指導が効果的だ。

言葉の指導は一過性のものであってはならない。授業では、ささやかな問い掛け一つにも気配りと工夫を忘れずにいたいと思う。

第49回「おかねの作文」コンクール　入賞者決定!!